



Title	ライフヒストリーに基づく奈良県十津川村における「人と自然の交流」の変容の考察：高度経済成長期から現在を中心に
Author(s)	吉成, 哲平
Citation	平成28年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2017
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/60309
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

平成 28 年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏 名	よしなり てっぺい 吉成 哲平	学部 学科	人間科学部 人間科学科	学年	3 年					
ふりがな 共 同 研究者名	なし	学部 学科		学年	年					
					年					
アドバイザー教員 氏名	河森正人	所属	人間科学研究科							
研究課題名	ライフヒストリーに基づく奈良県十津川村における「人と自然の交流」の変容の考察 ―高度経済成長期から現在を中心に―									
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。									
1. 研究目的 奈良県十津川村神納川地区住民へのライフヒストリーの聞き取り及び文献調査を通じ、高度経済成長期から現在（1955 年～2016 年）に至るまでの、生業の変化を中心とした、住民と周辺自然環境との関係性の変容を明らかにすることで、①国土政策が多義的な「人と自然」の関わり合いを改変する可能性について再検討し、②今後「縮減」が予想される日本社会において、人と自然が新たに結び合う可能性について考察する。										
2. 研究計画及び研究方法										
2-1. 調査地域 奈良県十津川村神納川地区（五百瀬・山天・内野集落）										
2-2. 調査期間及び概要 2016 年 8 月 18 日（木）から 9 月 3 日（土）までの 17 日間（うち、調査地域滞在は 15 日間）、奈良県十津川村神納川地区内の五百瀬、山天、内野の三集落において、計 11 名の地域住民の方に対してライフヒストリーの聞き取りを行った。また、滞在期間中、大字小原にある十津川村歴史民俗資料館及び村役場にて資料の収集を行った。										
3. 研究成果及び考察										
3-1. はじめに 筆者がはじめて十津川村の本地区を訪れたのは、2015 年の秋、友人に誘われ稲刈りのお手伝いに伺ったのがきっかけであった。以来、何度もこの地区の方々にお世話になる中で、ある住民の方の「お金はないが、ここには土も石も木もある」という言葉に、都市での生活では決して										

て持ち得ないであろう日々の暮らしへのまなざし、あるいはその生活と密接に結ばれた自然への思いが感じ取られた。他方、本地区を含め、深い山々に囲まれた十津川村全体で終戦後から高度経済成長期（1955～1973 年）にかけ「拡大造林」政策により山林の雑木が杉を中心とした人工林へ、また昭和 35 年（1960 年）竣工の風屋ダム建設を筆頭とした十津川流域における地域開発により、前者は猿・シカ・イノシシ等の野生動物の集落への出現、後者は河川への砂利の流入による河床の上昇及びそれに伴う鮎・アマゴ・サツキマスといった魚の減少等の形で周辺生態系に変化が見られる。加えて、昭和 30 年代から 45 年にかけてその最盛期を迎え、「十津川人は山一本の暮らしだった」、「山が暮らしの軸だった」と言われるように、多くの地域住民が就いていた林業が、現在ではかつての勢いを失っている。本稿では、こうした現状を踏まえ、戦後日本社会の構造が根底から転換したとされる、高度経済成長期における地域開発政策を整理しつつ、上述の研究目的を明らかにする。

3-2. 十津川村における身体性と靈性—フィールドで感じたこと—

本地区は村内北西部に位置し、現在 33 世帯 63 人の方々暮らし。地区内には、高野山と熊野本宮大社を結ぶ世界遺産小辺路が通り、近年では外国人登山客の増加により地区内 2 軒の農家民宿に滞在する旅行者も多い。約 2 週間に亘る滞在中、筆者はこれらの農家民宿でお世話になりながら、谷間を神納川が流れ、山に囲まれた字と字の間を歩き、ときに下草刈りのお手伝いをさせていただきながら、様々な方の人生史語りから描き出される戦前・戦後の神納川の姿を伺った。山肌を照らす 8 月の日差しはとても強く、しかし集落を結ぶ山の小道に入ると、空気は少しひんやりとして、そこは心なしか安堵を覚える場所でもあった。本論の前に、ここではそんな神納川で筆者が立ちどまり考えたことを特に 2 点、記しておきたい。

まず、約 2 週間の滞在中、寝起きをさせていただいた 2 軒の農家民宿で筆者にとって意外に思われたのは、朝晩、民宿の方が欠かさずに天気予報を視聴することであった。十津川村は、2011 年の紀伊半島大水害をはじめとして、昔から水害の大きな影響を受けてきた場所である。従って、気象情報を日常的に確認することは、筆者が翌日の天気を確認するという以上の意味合いを持つと思われる。現に、毎晩定時には、チャイムとともに村の防災無線が流れる。また、翌週の台風に備えて田んぼの縁だけを先に刈り入れておくという出来事や、あるいは車に同乗させていただいた際、雨後の川の濁り度合いによって神納川上流の状態を確認されることもあった。それは、山に囲まれた土地での暮らしは天候に大きく左右される、という言葉に集約されるのかもしれない。しかし、以上の経験は、筆者と山で生活する人びととの身体感覚の違いを感じさせた。つまり、気象情報等のテクノロジーによっては完全に予測し得ない自然の変化に対して、水害の記憶を含めた身体的な経験もまた大きな役割を果たしている、ということである。

こうした自らの身体に基づく、身の回りの自然への知覚とも呼ぶべきものの存在が、今回の滞在中を筆者との間に感じられた第一の違いである。つまり、しばしば現代社会を形容する「リスク社会」という言葉が、「巨大なインフラによって支えられた、個人がもはや制御することのできない社会」であるとするのなら、そのような「私たち」から失われたもの、あるいは持ち得ないものとは、常にそこにある自然、あるいは日常的に接する自然と密接に結びついた身体感覚であるのではないかと感じた。

さて、神納川を回る中で筆者自身よく目にし、またよく案内をしていただいたのは「山の神」

と百姓の神である「庚申様」を祀る祠である。前者は各字の、それも少し山の中に分け入ったところに、後者は字の間を結ぶ道々に鎮座していた。「山の神祭りのときには、仕事が休みになるが、それを破って事故に遭い死んだ者もいる。…（どの神様も）荒神さまで、こわいこわい。したらあかんことはせんほうがええ。」（内野・60代男性 kM さん）、「（この土地で）変わらないのは、神様が鎮座していること。…信仰とは、信じ迎えること。神は目に見えないけれど、命を守ってくれる。昔の人もそうだったのだから、間違いない。」（内野・80代男性 tM さん）、と語られる通り、今でも神納川に住む人々は、毎月決まった日にお参りに訪れ、時におはぎなどをお供えする。五百瀬で農家民宿を営む T さんが「昔は、（山の神や庚申さんへのお参りが）習慣、即生活だった」と筆者に話して下さったように、「山仕事」を暮らしの軸としてきたこの土地の人々にとって、その土地で暮し続けることにより現出すると筆者には思えるローカルな「神」を祀ることは、「信仰」という言葉で表される以前の素朴な行為であったように感ぜられた。

後述するように、戦後から現在までの大きな時代の転換を背景に、神納川での暮らしもまた「近代化」したのかもしれない。しかし、そのような「空間の均質化」が進んだのだとしても、そこには確かに都市とは異なる風土における暮らしがあり、その微妙な肌理を無視することはできない。

3-3. 高度経済成長期から現在までの国土の変容

次に、本節では、①終戦後から高度経済成長期における十津川流域の地域開発の流れを概観し、②その当時の生業である「山仕事（林業）」を営んでいた人々の語りに着目した上で、③そうした時代変化の背景にある国内・国外要因について整理する。

十津川流域における地域開発は、終戦後ほどなくして国策の下、強力に進められた。まず、昭和 22 年（1947 年）には、①奈良盆地の水田の干害対策、及び②猿谷ダム建設による水力発電を目的とした県による「十津川紀ノ川総合開発事業」が計画され、これを端緒に、昭和 26 年（1951 年）には「戦後に於ける国土の徹底的開発」を目的とした国土総合開発法が施行、前述の計画を含めた「吉野熊野総合開発事業」が決定された。これにより昭和 31 年（1956 年）には、10 年計画で「(1)電源開発 (2)山林資源開発 (3)農業資源開発 (4)国土保全 (5)交通施設の整備」が主要五大目標に掲げられ、併せて水産資源・観光資源開発の推進が目指された。（奈良県教育委員会 1988: 200）とりわけ、和歌山県新宮市と奈良県大和高田市（後に大阪府枚方市まで追伸）を結ぶ国道 168 号線の開通は、昭和 30 年代の村内ダム建設及び森林開発を加速させる。同時に、昭和 30 年（1955 年）以降、これらの建設工事の為に多くの労働者が十津川村へ来住し、昭和 35 年（1960 年）に村内人口は 15,590 人（3,117 世帯）というピークを迎えた。当時を知る人の語りの中には、しばしば「ダム建設の際には、四国、九州から多くの労働者が家族ぐるみでやって来た。自分が小学生時代には、多くの転校生がいた。それも道ができれば故郷へ帰っていった。」（内野・60代男性 N さん）といった四国や九州からの労働者のエピソードが登場する。こうした一連の開発により、それまで山から伐採し、筏により新宮、田辺、五條、橿原をはじめとした周辺市の貯木場へ流送していたのが、昭和 30 年頃を境に陸送へと切り替わった。加えて、十津川村の森林資源も終戦直後の荒廃した国土において当時圧倒的に不足していた建築材として用いられるのみならず、製紙業（パルプ産業）へ供給するため、昭和 32 年（1957 年）の国有林経営合理化方針による「成長量の確保のみを考慮した針葉樹林一辺倒の」造林事

業が強力に推し進められる。これにより広葉樹林、老齢樹の多くは人工林に取って代わった。(谷本 2006: 59)

他方、こうした林業の全盛期である、昭和 30 年から 45 年頃にかけての「山仕事」に目を向けてみると、「林業が盛んだった頃には山を切って嫁入りの費用になった。新宮や樫原に貯木場があり、トラック一杯で家が建つと言われた。」(内野・80 代男性 O さん)、「山は家庭の財産だった…(高度経済成長期には) 苗木を作ったり、下刈り人夫として働いた。20 町歩の山を枝打ちしたり、6 月から 8 月の暑い時期には下草刈りをした。暮らしていくため、大変ということはない。自分の山は冬の間雪が降っても手入れをした。」(五百瀬・70 代女性 T さん)、「(当時は) 無我夢中になって働いてばかり。誰にも負けんくらい働いた。苗を育て、3 年経ったら山に植えた。あの頃は一生懸命親に仕えていた。子どもを置いて、掃除、洗濯だけはきちっとしてから、山に入ったりしていた…私は有り難かったなあ思うよ。働くだけでよかった。」(山天・80 代女性 M さん) と語られるように、「山仕事」が文字通り「暮らしの軸」であり、かつ、暮らしの厳しさと表裏一体のものとして結びついていた様子が伺える。

さて、前述の「ダムブーム」は開発工事の終了とともに収束を迎え、村内人口は翌 36 年から現在に至るまで一貫して減少に転じている。象徴的であるのは、東京オリンピックの年である昭和 39 年(1964 年)には、村内の人口減少に伴い、かつてはほとんどの字に設置されていた小学校、そして中学校の統合が開始されたことである。こうした背景には、①産業構造の転換(重化学工業化)、②若年層の都市転出が挙げられ、加えて③貿易自由化(昭和 39 年)により、外材の輸入拡大が開始され、国際的な材木価格が低下することで、それまで需要増大による伐採と造林を進めていた林業が不況に転じた。

なお、上述の変化には、1960 年代初頭から始まる社会構造の根本的な変革をもたらした 2 つの政策が密接に関係している。すなわち、池田勇人内閣の国民所得倍增計画のもとで進められた、「農業振興とともに工業化のための労働力移動、さらに第二次および第三次産業に向けての労働力の創出／調達という政策的なねらいをもつ」農業基本法(昭和 36 年)及び「国土の均衡ある発展」を掲げる一方で、「日本経済のエンジンとして、太平洋ベルト地帯に大企業・生産機能を集中立地」することを目指した全国総合開発(昭和 37 年)である。こうした政策誘導による地域開発により、高度経済成長期にかけ国土は大きく変容し、同時に現在まで続く「向都離村」の流れが決定付けられた。(中澤 2012: 177-184, 吉原 2004: 117-118)

3-4. 「人と自然の交流」の再考

以上、こうした一連の変化が「人と自然」の関わりあいによどのような影響を及ぼしたのか、鬼頭(1996、2006)の議論を中心に考察したい。

鬼頭は「人と自然」との関係性を、「生業—マイナーサブシステム—遊び」という「連続的な形で存在している」3 つの位相で整理する。なお、ここでいう「マイナーサブシステム」とは、山菜採りやシカ狩といったような「経済的な意味が希薄であるにも関わらず、熱心に受け継がれているような、マイナーな生業的な営み」を指す。そして、この 3 つの位相の中心軸には、「実際に獲って食べる、売買する」といった物質的・社会的・経済的な関係性と、「作物・動物への精神的な思いや収穫儀礼」といった精神的な関係性が貫いている。しかし、こうした「自然のシステムに適応するものとしての人間、人間による働きかけの中で変化する自然」という相互の関わりあいは、近代化の中で、「生業＝サブシステム」の産業化と精神性の喪失、

つまり「人と自然」の関係性が物質的かつ社会経済的な「フィジカルな」領域だけに限定され、その多義性が失われた。その上で鬼頭は、この「人—自然」間の多義性の回復をこれからの課題として挙げている。(鬼頭 2006) 言い換えれば、ここで指摘されていることは「人と自然」の「社会経済的、文化宗教的な」全体性の回復の方途の探求にある。

この点について言えば、例えば、「川には砂利がどんどん入ってくる。もしダムをなくしたら10年で川は元に戻るだろう。つけ針をしたって一匹も釣れないし、今はもう川に行く楽しみがない…それに一年でどれだけ砂利を出したとしても、この間のような台風(注: 2011年 紀伊半島大水害)が来れば一晩で元通りになる。自然を壊したらよう戻さん。ホテルが窓から入ってきて蚊帳に止まったという時代もあった。」(内野 60代男性 km さん)、「3月の彼岸にはぼた餅をこしらえる、それが楽しみで、一つ失敬して足りないこともあった。6月に入り、水が温もってくると田植えをした。田んぼへは山の水を直接引いてきた…ここらは田んぼばかりだった。耕運機が入る前は、牛で鋤いていて、牛の糞を肥料として田んぼに入れていた。田んぼには、ウナギやドジョウがたくさんいて、一週間ぐらい泥を吐かしてから焼いて食べると旨かった。田んぼからウナギがいなくなったのは、伊勢湾台風(昭和34年)のときに山崩れが起きた後だ。」(内野・80代男性 O さん)、「子どもの頃は川で遊んだし、もちろん山で遊んだりもした。だが、今のように熊や鹿、サルが(集落に)出ることはありえなかった。」(内野・60代男性 N さん)といった、「遊び」、「マイナーサブシステム」の場としての「自然」が変化したという語りが聞かれた。加えて、先述した通り、「生業」としての「自然」との関わりも、上述の要因を背景として山仕事の継続が困難になったことにより、ほとんど無くなったと言える。

このように、十津川の自然が「喪失と変容」の文脈で語られる一方、3・1で触れたように、四季という循環する時間の中で、日々田んぼや畑に出向き農作業に勤しみ、その中で収穫された作物のやり取りを通じ、他の字に住んでいる人同士が今も結ばれている。また、大宮神社へのお参り(1月・7月・12月)、観音さん参り(2月)、葬礼社(8月)、山の神祭り(11月)に見られるように、規模は縮小したものの、そのような循環的な日常の中に埋め込まれた祭礼が今もなお執り行われている。それらは、外部のサービス、資本主義的なプロセスの中に全てを委ねるのではなく、「生きられる空間」においてこの土地の人々自らが自らの手で行ってきたことでもある。これまで概観した「近代化」により、生活様式、人口、周辺自然環境が変化した一方で、神納川の暮らしの中心には、天候・土壌・河川の変化をはじめとした自然を知覚する「身体」がある。そして、「人と自然」の全体性の回復の手がかりとは、そこにこそあるように筆者には思われた。つまり、日々の暮らしにおいて、ローカルな、そして、自らの手で扱うことのできる範囲の自然と生身の身体が関わりあう中で、四季、すなわち循環する時間と空間を生きるということである。ただし、この「つながり」とは「私」という主体により明示的な目的を持って結ばれるものではなく、ある風土との半ば縁起的な出会いにより、事後的に了解されるものであろう。「つながり」の契機はどこからでもよい。重要なのは、各々がその契機たるそれぞれの風土を「持つ」こと。そして、イメージの上の抽象的な自然ではなく、五感によって経験された自然から、そのように結ばれた「私」の身体の存在を知覚することである。無論、ここ神納川においても全てが「自給自足」の暮らしである訳ではなく、都市との深い社会経済的なつながりの中にある。また、上述の地域開発による農村、さらに言えば多義的な周辺自然環境が変容する一方で、そのような「開発」が村での暮らしを支えてきた側面もある。しかし、先述の戦後史が私たちに教えることの一つは、「成長」の物語と同時に、私たちは一人のヒトの

生身の身体では到底扱うことの出来ない環境を生み出してしまったことではないか。そして、個々人は、そのような空間の中の（例えば「ユニクロ」や「スタバ」のような）もはや記号のようにのみ消費される場所で交換可能な一存在として「ある」のではないか、ということである。そうした巨大な都市空間の閉じられた箱の中で、「成長と発展」という直線的な時空間の中にのみ生きるのではなく、人々によって生きられたある固有の歴史の厚みを持った場所、人や自然が「ただそこにあること」が「私」の存在を基礎付けるような場所を、「縮減」する社会の中で、今後どのように維持あるいは創出することが可能かを検討する必要があるだろう。「人と自然」の全体性の回復は、以上の「場所のアイデンティティ」を巡る議論をもその射程に含めながら、「身体」という有限な存在によってはじめて成されるものと考ええる。

3-5. おわりに

神納川に滞在する間筆者が痛感したのは、常日頃どれほど自分自身が外部のサービスに依存しているか、ということである。農作業も、野菜の調理の仕方も、山仕事の「えらさ」も、私には何もわからなかった。インタビューを重ねるうち、そんな「よそのもの」が「人と自然」の関わりあいを考えること自体にある種のためらいを覚えたが、東京と大阪での暮らし方しか知らないからこそ見えてきた差異や、容易には解くことのできないいくつかの問いが生まれたように思う。本研究の聞き取り調査にあたりご協力頂いた神納川地区の方々、とりわけ2週間に亘る滞在の中で筆者をお世話して下さいったばかりか、たびたび地区の方に取り次いでいただいた、農家民宿「政所」の辻伊久子さん、成晃さんのお二方、「山本」の中南太一さん、佐栄子さんご夫妻、そして、ご助言を頂いた河森正人先生（人間科学研究科）、瀧上ゆかり先生（未来戦略機構）、上須道德先生（工学研究科附属オープンイノベーション教育研究センター）に厚く御礼申し上げます。

4. 参考文献

- 1.岩波新書編集部（編）（2010）「日本の近現代史をどう見るか」岩波書店.
- 2.エドワード・レルフ（1999）「場所の現象学」筑摩書房, 117-158.
- 3.オギュスタン・ベルク（1992）「風土の日本」筑摩書房,150-213.
- 4.鬼頭秀一（1996）「環境倫理学の哲学的再検討—学際的視点から」『哲学』47, 74-88.
- 5.鬼頭秀一（2006）「環境倫理における風土性の検討」『公共研究』3(2),47-60.
- 6.小松和彦（2002）「神なき時代の民俗学」せりか書房, 5-109.
- 7.関礼子・中澤秀雄・丸山康司・田中求（2009）「環境の社会学」有斐閣.
- 8.谷本丈夫（2006）「明治期から平成までの造林技術の変遷とその時代背景—特に戦後の拡大造林技術の展開とその功罪—」『森林立地』48(1), 57-62.
- 9.中澤秀雄（2012）「地方と中央—『均衡ある発展』という建前の崩壊」, 小熊英二（編）「平成史」河出書房新社, 169-216.
- 10.奈良県教育委員会事務局文化財保存課（編）（1988）「十津川 第5版」十津川村, 169-229.
- 12.山下佑介（2008）「リスク・コミュニティ論【環境社会史序説】」弘文堂, 70-88.
- 13.吉原直樹（2004）「時間と空間で読む近代の物語—戦後社会の水脈をさぐる—」有斐閣.